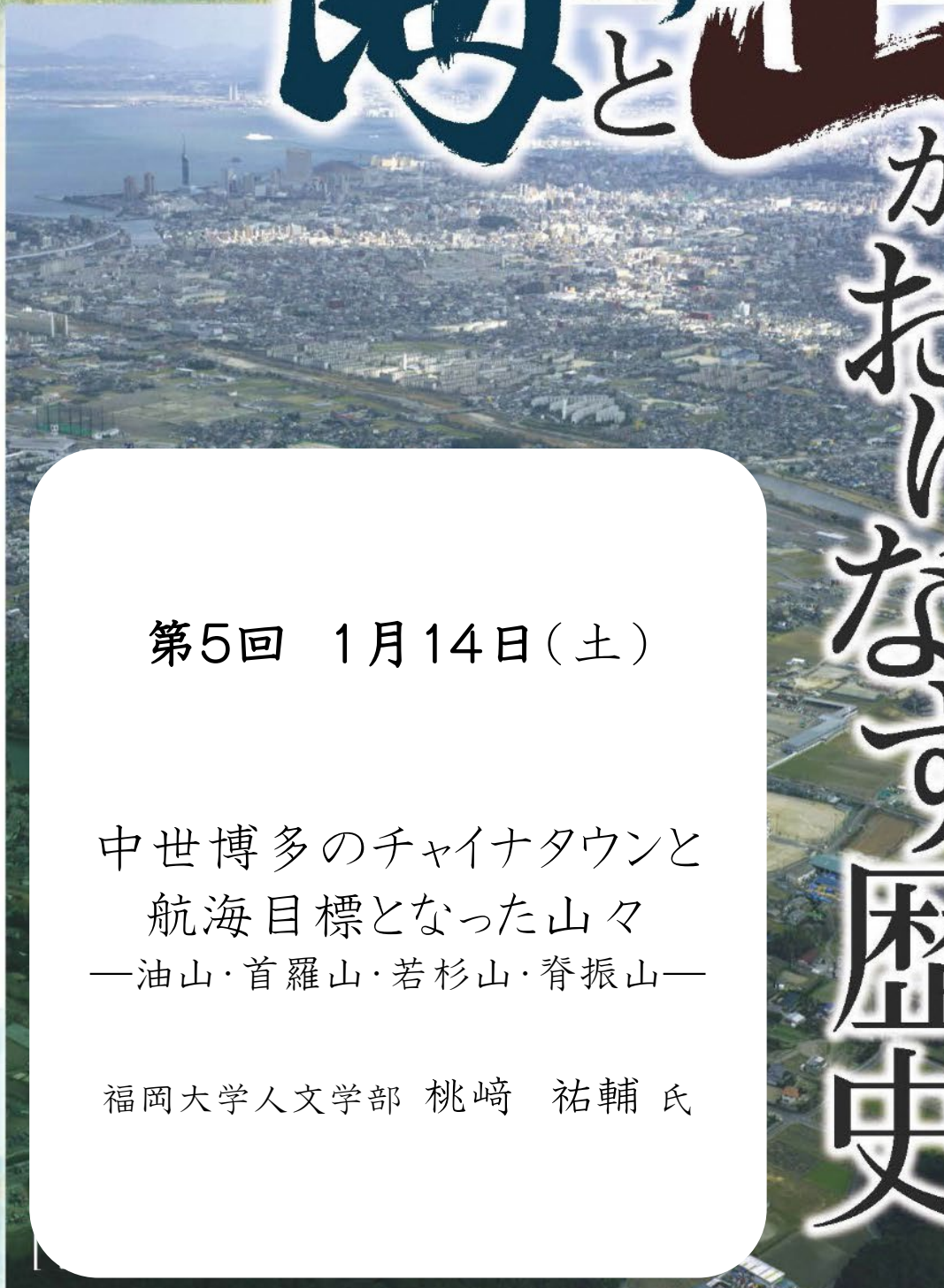


# 海と山

# がおりなす歴史



第5回 1月14日(土)

中世博多のチャイナタウンと  
航海目標となった山々  
—油山・首羅山・若杉山・脊振山—

福岡大学人文学部 桃崎 祐輔 氏

福岡市埋蔵文化財センター講座室  
13時30分〜15時00分 (13時00分受付・開場)  
※各回の定員、申込方法は、市政だよりと市ホームページでお知らせします。

入場無料

- 感染症の拡大状況により、上記内容を変更する場合があります。
- ご来場の前に福岡市埋蔵文化財センターホームページをご確認ください。

主催 福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田 2-1-94  
TEL: 092-571-2921 FAX: 092-571-2825  
電子メール: maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

講座とリンクした企画展

令和4年5月17日～  
令和5年3月31日

埋蔵文化財センター  
ホームページ

「福岡市の文化財」  
Facebook





「中世博多のチャイナタウンと航海目標となった山々－油山・首羅山・若杉山・脊振山－」

桃崎祐輔（福岡大学人文学部歴史学科）

## 遣唐使廃止(894),唐滅亡(907)と天満宮創建(903)



重要文化財 毛抜形太刀 伝菅公遺品 平安時代10～11世紀 太宰府天満宮  
菅原道真の遺愛品と伝承する太宰府天満宮伝来の毛抜形太刀

《北野天神縁起絵巻》詞書  
「筑前の国四堂のほとりに御墓所と点しておさめ  
ん奉らんとしける時、轎車道中にとどまりて**肥性  
多力の筑紫牛曳けども働かず其所をはじめて御墓  
所と定めて今の安楽寺と申すなり**」

### 講演要旨

894年、菅原道真は留学僧からもたらされた唐の衰退と混乱の情報を得て、遣唐使の延期を提案します。ところが907年に唐は滅亡し、遣唐使は廃止を余技なくされました。道真自身は大宰府に左遷されて903年に没し、遺体を運ぶ牛が動かなくなった場所に太宰府天満宮安楽寺が創建されたと伝えています。

一方朝鮮半島では、892年に新羅の軍人であった甄萱（キョンフオン、けんけん）が挙兵する一方、新羅王族で僧侶であった弓裔（クンイェ、きゅうえい）が泰封（のちの後高句麗）を建国し、弱体化していた新羅が分裂し、後三国時代が到来します。その混乱は936年に王建（ワンゴン、おうけん）の高麗が朝鮮半島を再統一するまで続きました。なかでも甄萱は、全羅道を中心に後百済を建国して百済の復興を宣言し、いにしへの百済の同盟国であった日本や、中国の地方政権である呉越との通行を図ります。

しかし白村江の悪夢再来を恐れる摂関貴族たちは、甄萱の遣使を追い返し、朝鮮半島の内乱の余波が及ばないよう、923年に博多湾岸に敵国降伏の八幡神を祀る管崎宮が創建されました。管崎大宮司の秦氏は大宰府の府官の立場を利用して対外交渉に関与し、次第に勢力を拡大していきました。

939年、伊予（愛媛）の官人であった藤原純友が1000艘の海賊船を率いて反乱を起こし、瀬戸内海各地を襲撃して941年には大宰府政庁を焼き払いました。中央から派遣された追捕使小野好古の部下、大蔵春實は博多湾の決戦で純友軍を壊滅させ、九州に土着して原田氏の祖となり、やはり大宰府府官として管内に勢力を拡大しました。

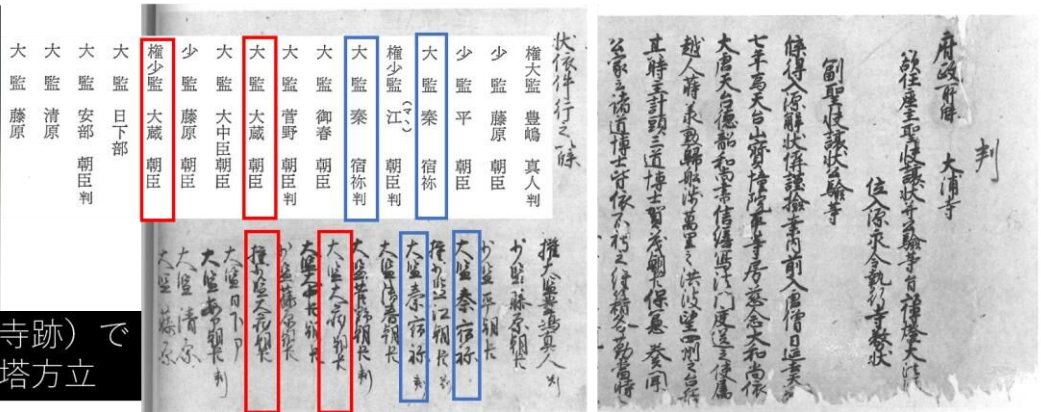
この頃、中国の天台山国清寺では、戦乱で天台經典の多くが失われ、庇護者である呉越国王・銭弘俶は、ありあまる財力を駆使し、天台經典の蒐集をはかりました。その命をうけた呉越の商人蔣承勳は鴻臚館を拠点に、比叡山延暦寺に天台經典の書写を依頼しました。肥前国出身の天台僧・日延は953年（天曆7年）、經典の送使として蔣承勳の船で呉越国へ渡り、銭弘俶から紫衣を贈られ、司天台（天文台）で学ぶ特別な許可も与えられ、957年に新暦法の符天曆と内典・外典約1000巻を携えて帰国しました。村上天皇は功績を表彰しようとしたが、日延は辞退し、康保年間（964年－968年）に大宰府の近くに大浦寺を建立しました。天台宗の総本山である天台山国清寺は標高2000～3000mの高山地帯にあったため、九州でも10世紀頃から天台系の山岳信仰が盛んになりました。大浦寺の経営には多くの大宰府府官も関与しており、呉越・北宋との交易拠点であったと考

えられ、大宰府の原山寺跡に比定する説が出されています。

## 肥前僧日延の呉越通交と大宰府大浦寺について記す 『大宰府政所牒案』(正本は天喜・康平(1052~1064)頃成立)



※原遺跡(原山寺跡)で出土した錢弘俶塔方立



『大宰府政所牒案』(正本は天喜・康平(1052~1064)頃成立)によれば、「前入唐僧日延、去天曆七年(953年)、为天台山宝幢院平等房慈念大和尚、依大唐天台德韶和尚書信、繕写法門度送之使。属越人蔣(蔣)承勲、涉万里之洪波、望四州之台岳。(中略)今遣唐法門使日延、(中略)渡海入唐、参着呉都。王者計細随身法門。歆喜感折喧明、賜以紫衣准内供奉。(中略)」と伝える、日本の天台座主延昌(慈念)が中国の天台僧德韶の依頼によって、法門を書写して送る使者となったのが日延で、呉越商人蔣承勲の帰船に便乗して天曆七年(953)渡海して五年にわたる習学の後、唐から曆経、法門等を持ち帰った。この功による僧綱宣旨を固辞して鎮西へ下向し、「府家の鎮山に近時」する大浦寺を創建し、その後、歴代住職が大宰府官人の庇護をうけたことが記されている。大浦寺の所在地は定かではないが、小田富士雄氏は錢弘俶塔方立が出土した原遺跡(原山寺跡)に比定している。

1019年には、突然、刀伊の賊が襲来します。この時、大宰帥藤原隆家の指揮下、鎮圧にあたった肥前唐津の源知、筑前の大蔵原田種材などは、その後の九州の武士の祖となる人物です。

1047年には、すでに「大宋商館」に変容していた鴻臚館が焼亡し、これと入れ替わるように、博多・箱崎にチャイナタウンの形成が加速化します。博多綱首と呼ばれた中国海商たちは、目的地の港にたどりつくために、目印となる山岳に特別な思いをもっていました。このため彼らは港の寺社のみならず、背後の山岳寺社に経塚・薩摩塔・宋風獅子、中国瓦を葺いた建物などを寄進します。

ところが1051年、博多大追捕が勃発します。大宰府府官のうち、大蔵原田派グループを主体とする検非違使が博多・箱崎の宋人街を一斉摘発し貿易商品を没収、筥崎宮にも乱入しました。背後には、もう一方の大宰府府官派閥を形成する筥崎大宮司秦氏にダメージを与え、利権を奪取する目的があったようです。

この事件以降、博多の中国海商たちはリスクヘッジのため、玄界灘沿岸各地の寺社の神人となって多極化していき、しばしば彼らが信仰していた山岳寺社に帰属することになります。こうして北部九州の山岳寺院は、庇護する中国商人の財力で山麓や流域の水利農地開発を進める一方、彼らとの橋渡しによって、対外交渉にも積極的に関与するようになります。本講演では、中国海商による山岳信仰の目カニズムを、油山・飯盛山・背振山・若杉山・首羅山・宝満山などから読み解きます。

近年、福岡市周辺から長崎県平戸市にかけての玄界灘沿岸では、中国製石造物の発見が相次いでいます。従来から礎石・宋風獅子の存在が知られていましたが、最近、石造仏塔、石造仏像の存在が次々と明らかになってきました。中でも薩摩塔と呼ばれる特異な仏塔は、中国の浙江省・福建省・江蘇省などに対比資料が見られることから、彼の地を故郷とする博多周辺の中国商人が、貿易船に積んで持ち込んだと考えられます。

またこうした新発見によって、九州在来の、地方色の強い石造物についても、関西地方で確立した日本的様式の石造物がローカル化したのではなく、九州西半部全域の沿岸部に搬入されていた若干の中国製石造物をモデルに、九州地方で模倣製作された中国系石塔が独自に発展した可能性も考えられるようになってきました。

### I. 博多の対外貿易

考古学では亀井明德氏が「住蕃貿易」(亀井1986・1992・1995・1997)、文献では林文理氏が「博多における権門貿易」(林1998)という概念を提示し、日宋貿易が博多居住の宋海商=博多綱首を介して行われたことが明らかになっている。大庭康時氏は、住蕃貿易拠点としての博多の性格を示すものとして、①貿易陶磁器の高い比率、②「綱」銘墨書の大量出土、③貿易陶磁器の一括大量廃棄遺構の存在、④貿易船のコンテナとしてもたらされた大型容器の出土の4点を挙げ、特に②と③を満たす遺跡が博多以外に存在しないことから、住蕃貿易が段階での恒常的な交易拠点は博多以外

になかったことを主張する。大庭氏はこうした博多の位置を「集散地遺跡」と呼び、日宋貿易におけるほとんど唯一の輸入品発送基地と位置づけている（大庭 1999・2003）。

## II. 鴻臚館体制の崩壊

外交使節の受け入れ窓口としての迎賓館から、私貿易のための商館に変容しつつも、唐・新羅・呉越・北宋などの賓客・商人を迎える公的機関としてまがりなりにも続いていた鴻臚館体制は、11世紀前半に崩壊したと考えられている。すなわち、永承二年（1047）年、大宰府は「大宋商客宿坊」に放火した犯人を捕縛したとの記事がある。これと対応するように、鴻臚館では11世紀中葉を境に、遺物が出土しなくなり、この火災によって、鴻臚館は廃絶したと考えられる（大庭 2004）。

## III. 博多遺跡群と博多湾周辺の「唐房」

国際貿易都市博多の形成は、鴻臚館体制の停止以前から、開始されていた。『今昔物語』には、11世紀初め頃博多に屋敷を構えた宋人と、大宰府官秦定重との取引が描かれている。

長和三年（1014）には、宋の医師恵清が博多に在り、大宰権帥藤原隆家・大納言藤原実資が薬を求めている。永長二年（1097）大宰権帥源経信が没したときには、「博多にはべりける唐人どもあまたきてとぶらひける」（散木奇歌集）と記されるまでになる（大庭 1995）。

滋賀県大津市西教寺所蔵「両卷疏知礼記」上巻・京都府要法寺蔵「観音玄義疏記」奥書には、永久四年（1116）歳次丙申五月十一日、筑前国薄多津唐房大山船龍共三郎船頭房、以有智山明光房唐本移書畢。已上。」とあり、龍共は中国人の姓、三郎は一族の同世代内の輩行による一般的な呼び方であり、龍共三郎は宋海商であったと考えられる。12世紀前半の博多では、宋人海商の宿坊が博多唐房＝宋人街にあったことを示す（川添昭二 1988 b・亀井明德 1992・大庭 2004・榎本渉 2005）。亀井氏は、住蕃貿易史料としてこの資料を用い、博多の貿易陶磁器エリアとの対応から、旧博多浜東側の聖福寺・承天寺と西側の櫛田神社・冷泉津に挟まれた500m四方にあて、大庭康時氏は更に博多浜西縁付近に限定した。

さらに北宋が滅亡（1127）する頃から、博多の貿易陶磁器出土が激増し、特に同安窯や龍泉窯の製品が増えてくる。大庭氏は12世紀後半になると、陶磁器一括廃棄遺構の範囲が拡大することから、この頃から宋人居住区は拡散し、日本人と宋人が混住するようになると推定する（大庭 1995・1999・2001）。

## IV. 経筒の銘文にみる中国商人

小田富士雄氏は若杉山南麓の佐谷観音谷経塚出土天治二年（1125）銘二段積上式経筒に見られる「宋人馮榮 伏」「弟子鄭」、および出光美術館所蔵、今宿発見の保延二年（1136）銘四段積上式経筒の筒身最上段の内面の「李太子」の墨書銘を宋人が経塚造営を行った例としてあげる。前者は、銘文中の記載順序からみて、宋人馮榮がこの経塚の願主である。また後者は、李太子が母尼の追善のために造営しており、小田氏はこの李太子を宋人貿易商の父と、日本人妻との間に生まれた国際混血児ではないかと推定している。

福岡市西油山天福寺でも、天永三年（1112）や保安元年（1120）銘の銅製経筒だけでなく、陶製経筒や滑石製外容器の出土が知られているほか、5間5間の礎石建物跡付近からは、15～16世紀の瓦に混じって12世紀頃の中国系の草花文軒丸瓦が採集され、12世紀に中国商人の寄進で寺容を整えている。また油山旧蔵とされる梵鐘は、文治二年（1261）の銘を持ち、「大檀那比丘禅念故鄭三綱真之息 鑄工沙彌生蓮」と記される。鏡山猛氏は、この鄭真之なる人物は宋人の綱首で、三男である禅念が檀越となり父の追善のために鑄造した梵鐘と考える。油山は宋人の信仰を集めていた。

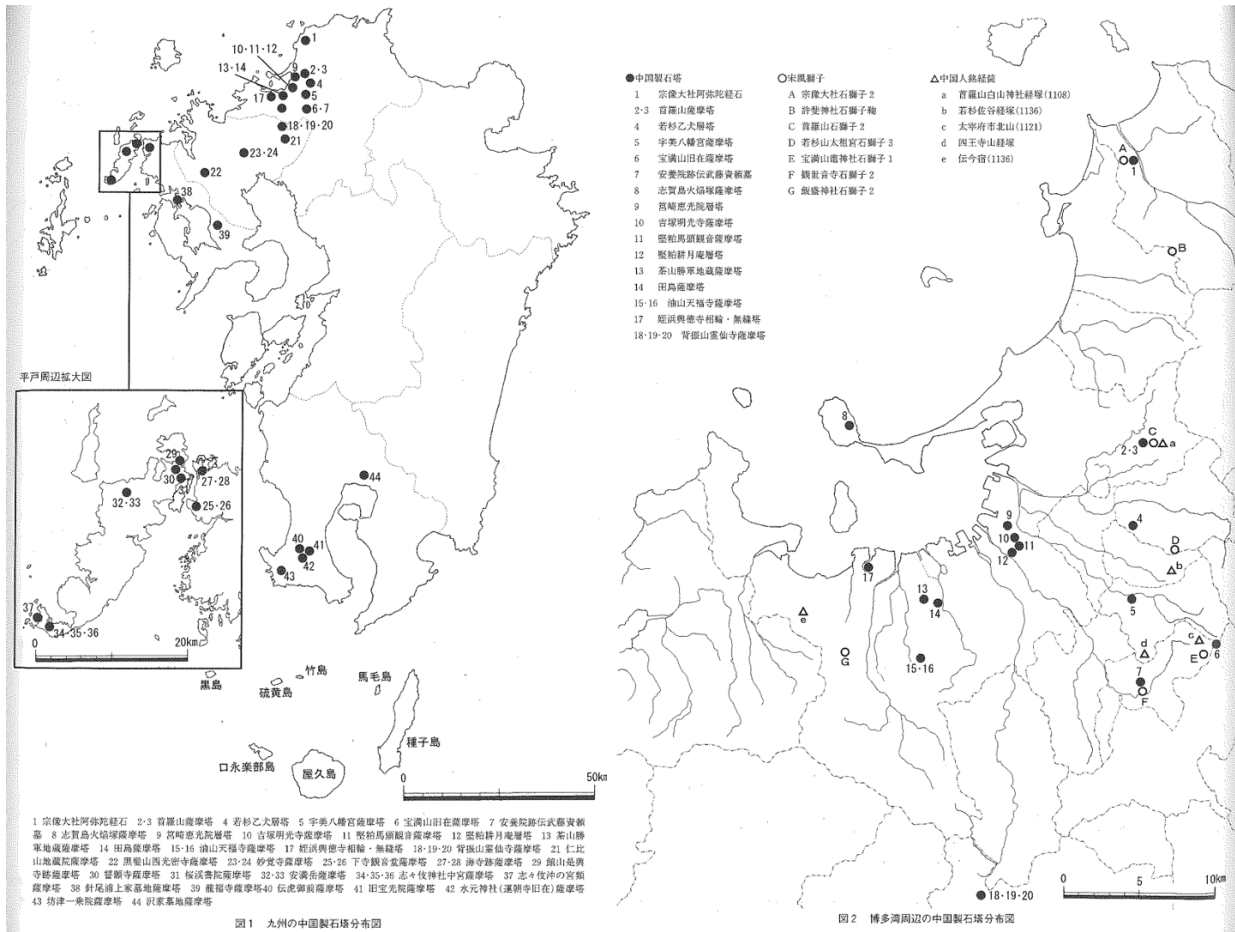
東京国立博物館蔵の粕屋郡須恵町佐谷字観音谷出土の天治二年（1125）銘鑄銅製経に、「宋人馮榮 伏」の針書銘があり、また出光美術館所蔵の「福岡県糸島郡今宿村今宿」（現福岡県糸島郡今宿）からは、「為尼妙経尊靈往生施入 保延二年（1136）十月廿一日乙卯李太子之」銘経筒が出土している。

李姓中国商人の跡取り息子とみられる李太子が、亡母の追善供養のため施入したとの記事があり、中国商人の現地妻となった日本人女性を供養したと考えられる。ここで注目されるのは、中国商人と日本女性の婚姻である。長沼賢海氏が好論「国際混血児」（長沼賢海 1953）で詳述している。

初期の経筒の多くは金属製経筒だが、北宋が滅亡し南宋が成立するころから、中国陶磁器の経筒が増えてくる。浙江省・江西省・福建省などで生産されたものである。福岡県筑紫郡大宰府町四王子山出土の陶製経筒の底に、「莊綱」墨

書銘があり、筑後地方発見の陶製経筒の底には「李」銘墨書があるものが知られている（小田富士雄 1980）。「荘綱」の「綱」は「綱主」とよばれる住蕃貿易に従事する中国商人か、その配下の「綱司」等を示すとみられる。

色定法師一筆一切経は、宗像社の僧色定法師（良祐）が1187年から41年間かけて宋版一切経全5084巻を書写したもので、4336巻が現存する。奥書に写経事業を援助した「綱首張成」「李」らの名が見える。



## V. 中国商人の故郷—寧波・泉州

中国浙江省の寧波（明州）は、日本と深いつながりがある港町だ。それは商業にとどまらず、阿育王寺や天童寺など、日本の天台宗・臨済宗・禅宗・律宗など平安・鎌倉仏教の故郷でもある。

寧波の天一閣にのこる三枚の刻石には、「日本国大宰府博多津居住弟子丁淵」「日本国大宰府居住弟子張寧」「寄日本国孝男張公憲」の名が刻まれている。すなわち博多津住の丁淵、大宰府住の張寧、中国建州晋城県出身で日本に居住している張公意の3人が、宋・乾道三年（1167）、寺の門前道路建設のため、石敷の道1丈（約3m）分の代銭10貫文を各々寄進したことを刻んでおり、博多と寧波とを結んだ交易に従事した宋人の実態を窺わせる。

彼ら宋商人は、博多に家を構え、日本人を妻とし、子をなし、自身は中国本土と博多を往復して交易を行っていた。これを博多綱首と呼ぶ。綱首として名前を残しているものとしては、文治四年（1188）の張成・李栄、建久八年（1197）の張国安、建保六年（1218）に秀安・張光安、仁治三年（1242）頃に謝国明、弘安四年（1281）前後の張興・張英らがあげられる。

中国福建省の泉州もまた、日本と関係が深い。特に陶製経筒や褐釉陶器、甬田窯の青磁、また鉄素材などが日本に送り出されている。少し遡れば、この港にはイスラム教徒の居住が多く、モスクの「清真寺」もある。鴻臚館で出土したイスラム陶器も、この港から送り出されたものだろう。

## 宮崎恵光院の 中国製層塔



**唐船塔**

謡曲「唐船」は、日本に傭われた唐人（相慶）人が箱崎殿（宮崎恵光院）に仕え、日本人妻との間に二人の子をなして平和に暮らしていた。

やがて唐土に残した子供一人が迎えに来たので箱崎殿はこれを構ひ日本で生まれた子も連れて帰ることを許した。そこで親子共々喜んで帰つたが、夫婦、母子別れの悲劇もからまつた物語である。迎えに来た子が、父がもし死んでいたら建てようとして持ってきた供養塔が、歌は聖徳寺の面佛（仙居和尚の作）で、

「箱崎のいへんの千層塔と云ふ、なまにしこえをのこり唐船」

又相慶人と妻とが別れる時に寝かけて名残を唄んだといわれる一對の石を、夫婦石といっている。

## 福岡市宮崎恵光院燈籠堂女神像 承元二年(1208)海中発見伝承



福岡市博物館、末吉武史氏の論考参照

### VI. 「博多大追捕」(1151)によるチャイナタウンの危機

正式な国交がなく、法的保護のない在留外国人は、しばしば危機に見舞われた。保元・平治の乱が目前に迫る仁平元年(1151)、太宰府検非違使所別当安清・執行大監種平・季実らが博多・箱崎で行った「博多大追捕」の記事には、「始自宋人王昇後家、運取千六百家資材雑物」、すなわちチャイナタウンの宋人商人たちが太宰府の役人に襲撃され、かれらの代表と目される王昇以下千六百家の財物を没収される事件が起こっており、さらにその追捕は箱崎宮乱入に及んだとある（『鎌倉遺文』一五七）。

ここにいう「千六百家」は博多にあり、また箱崎宮と神人のような関係であったと推定されている（大庭1995）。即ち、中国商人からすれば、日本の官吏さえも海賊や盗賊と同様危険な存在でしかなかった。彼等は博多の郊外の今津や津屋崎唐坊に移住したり、宗像大社などの有力寺社の庇護下に入るなどの対応策をとった。

#### ① 層塔の年代

福岡市宮崎宮龍王社旧在の恵光院層塔は、残存高約2m、本来は4m前後の巨大な石造層塔で残存する三層の各面には仏龕を伴う四天王や如来、供養者像を刻む（眞野脩2009）。これに類似する構成と石材の石塔に、浙江省寧波市東銭湖の二霊塔（後晋の924年とされるが、北宋の政和年間（1111～1117）銘がある）がある。

石材は白色粒子を含み史詔墓に使用されている奥石が類似する（佐藤重聖氏の御教示による）。恵光院塔は二靈塔のような層塔を簡略化・小型化した退化塔と理解できるが、その年代はいつか。

小田富士雄氏の検討（小田富士雄1988・1990）や『重要文化財明導寺七重石塔保存修理工事報告書』の成果を参照して九州での層塔の出現時期を見ると、鹿児島県大隅国分寺塔に康治元年（1142）銘があり、隼人塚（正国寺跡）層塔についても、付近に旧在した三尊石仏の如来坐像・菩薩立像に康治元年（1142）銘があり、層塔も同時期頃の可能性が高い。これらの層塔は素文で仏像彫刻はないが、軒下に垂木表現がみられる。

これに対し、13世紀前半には熊本県下や福岡県筑後地域の各地に垂木や四方仏表現を伴う層塔が出現し、嘉禄三年（1227）の熊本県永国寺五重石塔、寛喜二年（1230）の熊本県球磨郡湯前町明導寺層塔3基、貞永元年（1232）の福岡県筑后市熊野坂東寺層塔などの阿蘇凝灰岩層塔があり、関西地方に先駆けて四方仏彫刻がある大型層塔が出現する。

これら九州の古式層塔について、中国製層塔の影響下に成立した可能性に立てば、上限は1140年代以前、下限は1220～が考えられ、恵光院塔がその具体的な候補となってくる。

『宮中縁事抄』所収の中原師尚勘状に、仁平元年（1151）の大追捕の記事がある。大宰府目代平宗頼の指令で大宰府検非違所別当らが管崎・博多の大追捕を行い、綱首たちの首魁と目される宋人王昇後家を始め1600家の資材・雑物を運び取った。追捕は管崎宮内にまで及んだとされ、破却の標的は管崎宮であった。この事件の背景には、府務運営を担う府官内部の対立や権帥一時代の管崎宮支配の強化、管崎宮内反対勢力を排除しての貿易直轄化の志向などが推測される。この事件に見える管崎・博多の1600家すべてが宋人ではないにしても、両地帯に宋人が集住し、一体的に展開していたと考えられる（川添昭二1994）。すると恵光院層塔の造営は、二靈寺塔造立の1110年以降で、鹿児島県下に層塔が出現する1142年に近く、博多大追捕の1151年よりも前とすれば、1120～1150年の間、12世紀前半の可能性が高いと考える。しかし他の中国製石造物が示す12世紀末以降とは懸隔が大きい。

恵光院には、海中出現と伝承する十一面観音石仏（台座を含む総高70.7cm）もあり、台座に雲脚や如意頭文が刻まれており、中国製と思われる。石仏を安置する燈籠堂は承元二年（1208）の創建を伝える（恵光院1984）。末吉武史氏による検討によれば、宋商たちが信仰していた海上神であろうか。

以上、恵光院層塔は寧波東銭湖二靈寺塔に近い12世紀前半とみるか、宝頂山石窟や恵光院石仏の伝承年代に近い12世紀末～13世紀前半とみるか、なお検討を要する。

**VII. 阿弥陀経石が語る宗像大宮司と中国商人の縁組**

**1 宗像大社の阿弥陀境石**

宗像大社では、3人の大宮司が中国女性と婚姻しており、阿弥陀経石や宋風狛犬が遺されている。阿弥陀経石は、中央に宋風の阿弥陀像を刻む。平重盛が宗像氏国の家臣を中国宋に派遣し、砂金三千両を育王山に寄進した答礼に、建久九年（1198）に宋から本碑が送られたが、平家滅亡で受取人がおらず、宗像に留め置かれたと伝える。梅園石製とみられ笠石・碑・台座の三石よりなり、高さ168cm。笠石には入母屋状の屋根と屋根瓦、鬼瓦などが表現されている。碑面は中央に瓢箪形の仏龕を彫り凹め、粒状の大きな羅髪のある如来像を表現する。

その両側には帯状の唐草文を表現する。台座には持ち送りのある反花座の表現があり、東大寺南大門石獅子や、福岡市博多区堅粕馬頭観音薩摩塔の反花座と類似する。碑石の各所には追刻銘があり、承久二年（1220）、寛喜二年（1231）などの年号がある。左側面の追刻銘には、承久二年（1220）二月二十二日、宗像大宮司氏忠の妻（張氏＝宋人）が、氏忠の父母（母は王氏＝宋人）らの菩提を弔うため、田地を寄進したと記されている。また大宋□□六年の銘があり、嘉定六年（1213）か紹定六年（1233）の可能性が考えられる。

**2 宋風獅子が語る日中交流**

宋風獅子・関連石造物一覧

番	寺社名	所在地	高さ	遺存	備考
1	新大仏寺	三重県伊賀市富永			
2	由岐神社	京都府京都市			
3	由岐神社	京都府京都市			



4	東大寺南大門	奈良県奈良市東大寺			
5	東大寺南大門	奈良県奈良市東大寺			
6	赤磐熊野神社	岡山県赤磐市熊野神社			
7	堰爪神社	岡山県瀬戸町堰爪神社			
8	三隈熊野権現社	山口県長門市三隈熊野権現社			
9	三隈熊野権現社	山口県長門市三隈熊野権現社			
10	宗像大社宋風獅子	福岡県宗像市田島宗像大社		完存	宗像大社伝世
11	宗像大社宋風獅子	福岡県宗像市田島宗像大社		完存	宗像大社伝世
12	許斐山宋風獅子毬				
13	首羅山遺跡	福岡県糟屋郡久山町大字久原	残118.0cm	屋根欠	首羅山頭光寺跡の白山神社
14	首羅山遺跡	福岡県糟屋郡久山町大字久原	残93.5cm	須弥壇・塔身・相輪欠	首羅山頭光寺跡の白山神社
15	若杉山太祖宮	福岡県糟屋郡篠栗町若杉			若杉山太祖宮下宮の御仮屋
16	若杉山太祖宮	福岡県糟屋郡篠栗町若杉			若杉山太祖宮下宮の御仮屋
17	若杉山太祖宮	福岡県糟屋郡篠栗町若杉			若杉山太祖宮下宮の御仮屋
18	宝満山竈門神社	福岡県太宰府市宝満山			
19	観世音寺	福岡県太宰府市観世音寺		ほぼ完形	
20	観世音寺	福岡県太宰府市観世音寺		相輪欠	
21	飯盛神社	福岡市西区姪の浜	阿形		
22	飯盛神社	福岡市西区姪の浜	吽形		
23	草野若宮八幡宮	福岡県久留米市草野字吉木			
24	大川風浪宮	福岡県大川市酒見字宮内			
25	海寺跡	長崎県田平町山内免海寺跡	残50cm		付近に薩摩塔あり
26	海寺跡	長崎県田平町山内免海寺跡	残20cm		付近に薩摩塔あり
27	志々伎神社沖の宮薩摩塔	長崎県平戸市野子町志々伎神社沖の宮	残151.5cm		付近に薩摩塔あり
28	地の島	長崎県	残29cm		
29	対馬黒瀬公民館	長崎県対馬			

博多湾周辺には、平安時代の末から室町時代にかけて、中国から輸入されたり、これを真似て作られたと思われる宋風獅子とよばれる古式の石像狛犬がみられ、6件（①宗像市宗像大社、②宗像市許斐神社（鞠のみ）、③久山町首羅山遺跡、④篠栗町太祖宮、⑤太宰府市観世音寺、⑥福岡市西区飯盛神社）が集中する。

①宗像大社の石灰岩製宋風獅子は追刻銘に建仁元年（1201）の銘文があることから南宋の12世紀後半の遺品と考えられる。唐草文を彫刻した雲脚状の台座にのる。

# 久山町首羅山「徐工」経筒(1109)と宋風獅子・薩摩塔

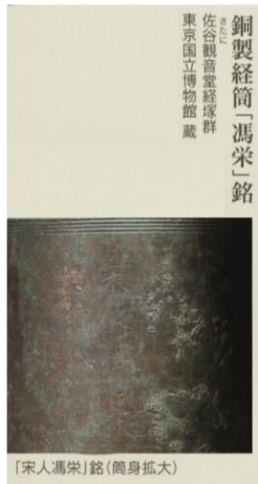


久山町報告書より転載



② 久山町首羅山遺跡の山頂にも、壊されて石塊のようになった狛犬があり、九州歴史資料館の井形進氏による調査で、一対の宋風獅子で梅園石製の可能性が高いと判明した。このうち西側の獅子は、頭から背中にカールした毛が表現され、また南側の側面には、結んだ飾紐状の部分があり、獅子が右手に持っている手毬につけられていたリボンであったと考えられ、おそらく吽形（オス）と思われる。これに対して東側の獅子は、左前足に付着した固まりから、子供の獅子が立ち上がって母親の脚にじゃれつく姿を表現していた阿（メス）と思われる。首羅山の宋風獅子は、近接しておかれている薩摩塔一對と同時期のものとみられる。山頂付近で出土した天仁二年(1109)銘四段積上式台座にみえる「徐工」墨書とともに、首羅山頭光寺と中国商人の関係を物語る。しかし山容の優れた若杉山に比べ、首羅山は目立たない山であり、航海守護神というよりは、伊野川・久原川の水源涵養林を擁する山として、むしろ荘園開発の拠点として信仰されたことを窺わせている。

# 福岡県須恵町佐谷経塚「宋人馮栄」(1125)



49 佐谷観音堂経塚群 さたにかんのとうきょうつかぐん  
福岡県糟屋郡須恵町/平安時代(天治二年(1125))  
明治時代に若杉山の麓で土砂流出により、五つの経筒が偶然発見された。本品は鋳造製の二段積上式の経筒である。筒に「天治二年(一一二五)」「宋人馮栄」の銘を針で刻む。博多の宋商人が発願したことがわかる。  
東京国立博物館蔵



滑石製浮彫菩薩形坐像 佐谷神社  
滑石製 たて三〇センチ、平安時代  
四臂像、面部刻離、右上手持物

## 篠栗町若杉山大祖宮宋風獅子



若杉山太祖宮には2セットの宋風獅子が伝世する。若杉山系の建正寺には宋人銘のある経筒が出土しており、12世紀前半より当地には宋海商の影響が窺える。

## 篠栗町若杉山麓乙犬中園の中国層塔軸部



若杉山太祖宮より西方、中園古墳近くの道路脇の祠内の中国製石造物の残欠。聞き取りによれば当地は太祖宮下宮の御旅所。なお太祖宮下宮に近い肥前谷遺跡では、大型のコンテナ陶磁器も出土。このルーツを探るため中国浙江省に調査に出掛けた。

④篠栗町若杉の若杉山太祖宮（上宮）内殿には、夫婦一對と忬形？一軀の2組3体の宋風獅子が伝来している。このうち夫婦一對のものは、滑らかな仕上げで石灰岩質の石質であるのに対し、パートナーを失って一体になっている忬形の宋風獅子は、首羅山の獅子と最も近い。右手に飾り紐付きの手毬を持っているが、頭の毛はカールしていない。従来、一方の宋風獅子より古いとも、もう一方を手本に室町時代頃造られたともされてきたが、今日的にみれば、鎌倉期に将来された、中国の梅園石製である可能性が高いと考えられる。太祖宮の狛犬は、「宋人馮榮」銘経筒とあわせ、若杉山と中国商人の関係を示唆している。太祖神社の下宮は今若杉東麓の篠栗町若杉にあるが、これは鎌倉時代の初めに、軍事的理由から登頂ルートを変更させたことによると伝える。当初は須恵町側から登っていたため、途中の山上に鳥居があり、そこから「高鳥居」（岳城山の別名）の地名が起こったとされる。

若杉山は大宰府・宝満山と、博多湾とを左右に望み、中国商人たちは、航海の目印となる若杉山を航海守護神として信仰・保護していたと考えられる。

⑤太宰府市観世音寺の石獅子（国指定重要文化財）は、プロポーションにクセがあるが、首羅山遺跡のものに似た構成をとる。『筑前国続風土記附録』には、「仏前の唐獅子は紫石にて古へ唐土より来りし物なるべし」『筑前国続風土記拾遺』には「講堂仏前の紫石の獅子は百済国より献ずると云」と舶載を伝承する。

⑥飯盛神社の砂岩製石獅子は14世紀代の遺品とみられ、文永八年（1271）の「飯盛社元三之次第注文」によれば飯盛社の大般若経会には姪浜興徳寺が参加し、油三升を納めることとされ、関係性が強かった。飯盛神社の宋風獅子は、姪浜興徳寺との関係から、1270年代以降の年代が考えられる。

博多湾周辺の事例のうち、宗像大社例には建仁元年(1201)銘があり、宗像社例に類似する太祖宮例や首羅山例は、13

世紀前後に位置付けられるが、宋からの舶載品かその模倣品かは微妙である(井形 2008)。最新の飯盛神社例は 14 世紀代の遺品とみられるが、興徳寺との関係からすれば、13 世紀後半まで遡る可能性がある。

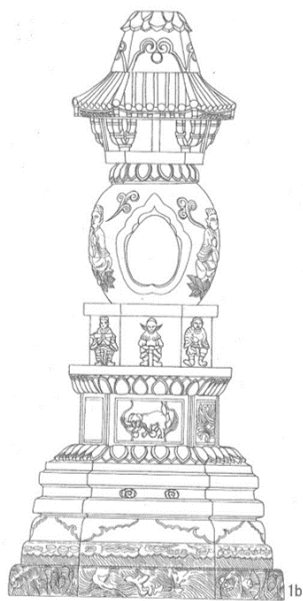
宋風獅子はこのほか、奈良県東大寺南大門(山川均 2010)、三重県新大仏寺仏像台座、京都市由岐神社、岡山県吉備津神社(小林剛 1955、稲本泰生 2006)、山口県大津郡三隈熊野神社(内田伸 1985)、長崎県平戸市海神社・平戸市志々伎沖の宮(井形進 2008)、対馬美津野黒瀬公民館の狛犬鎮子((財)西日本文化協会 1978)等の遺品が知られ、福岡県太宰府市宝満山には明代に降ると思われる菊目石製の獅子像が伝わっている(小田富士雄編 1982)。



1a 霊鷲寺1号塔銘文拓影 (県志2009より転載)

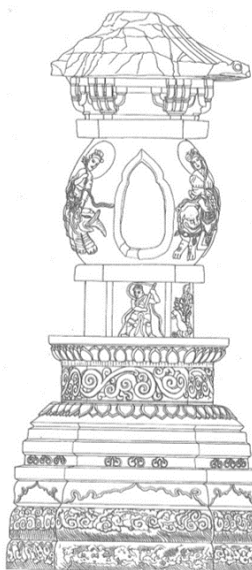


3a 霊鷲寺3号塔銘文拓影 (県志2009より転載)



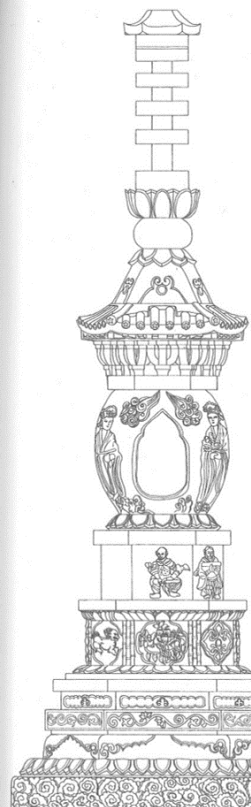
1b 霊鷲寺1号塔 南宋・嘉定九年(1216)

(阿部原図)



2 霊鷲寺2号塔 南宋・嘉定十一年(1218)

(桃崎原図)



3b 霊鷲寺3号塔 南宋・嘉定九年(1216)

(山内原図)



4 霊鷲寺4号塔 南宋・嘉定九年(1216)

(桃崎原図)

図5 浙江省麗水市万象山公園移築 霊鷲寺塔(1)(現地でのスケッチ図をもとに桃崎補正作図・トレース。縮尺不明)

図6 浙江省麗水市万象山公園移築 霊鷲寺塔(2)(現地でのスケッチ図をもとに桃崎補正作図・トレース。縮尺不明)

### IX. 薩摩塔—中国製石造物が語る博多の性格の変化

薩摩塔は、鹿児島県西部沿岸の川辺町・坊津市で最初に発見された特異な石塔で、その後長崎県平戸周辺から博多湾周辺で次々と見つかり、玄界灘沿岸にも広く分布していることが判明した。その構造は特異な一石彫成で、台座・軸・須弥壇・壺・宝珠の5つの部分からなり、軸部の四面に四天王を、壺部に僧形もしくは如来像を刻む。現在、中国本土では、薩摩塔と同一のものは未発見だが、ややピンクがかかった粗粒の凝灰質泥岩質の石材は、浙江省寧波で産出する梅園石とみられ、搬入品の可能性が高い。

現在、薩摩塔に近い特徴の石塔は、中国浙江省寧波郊外の東銭湖岸の南宋石刻公園内に置かれている延寿王寺塔に類似する武装した天部像や石龕中の如来像の表現がみられ(2010.3.23. 現地で実見)、福建省泉州市開元寺の本堂前参道の両脇にも、基壇上に雲脚・蓮座・敷茄子・半花座・壺・六角笠・相輪からなる花崗岩製の仏塔が8基ほど立ち並び、球状部に石龕を設け如来像を彫刻する点が共通する(2010.3.26. 実見)。また浙江省麗水市万象山公園の霊鷲寺石塔は、天部を彫刻した基壇上に中空で外面に雲文のある壺部が乗り、六角の笠と巨大な相輪からなる(高津孝・橋口亘・大木公彦 2010)。

これらの事例に基づけば、薩摩塔の原郷は中国浙江省周辺に存在する可能性が高く、浙江省温州市や麗水市周辺を今後探索する必要がある。宋風獅子とともに、博多周辺の対外交渉を物語る資料である。

博多湾周辺では、糟屋郡域の①久山町首羅山、②篠栗町若杉乙犬、③宇美町宇美八幡宮、④太宰府市宝満山旧在、⑤福岡市東区志賀島火焰塚、⑥福岡市堅粕4丁目耕月庵、⑦堅粕四丁目馬頭観音、⑧吉塚明光寺、⑨福岡市城南区茶山・⑩福岡市城南区田島、⑪佐賀県背振山霊仙寺などの例がある。

なお、最近、管崎宮から廃仏毀釈で隣の⑫管崎恵光院に移された、残存高2mもある巨大な石造層塔が見つかった。浙江省寧波市東錢湖の二霊塔（後晋の924年とされるが、北宋の政和年間（1111～1117）銘があるという）と構造や表現が似ており、白色粒子を含み蛇蟠石か小刑石らしい。

また恵光院には、台座が雲脚で中国製と思われる十一面観音石仏もあるが、その異国風の姿からみて、媽祖以前に船乗りたちに信仰された聖母（しょうも）の像ではないかと考えられ注目される。

①久山町首羅山の例は、太宰府生まれで承天寺の円爾弁円に師事し、入宋して中国径山に学んだ悟空敬念との関係が推定される。晩年首羅山に入り、文永九年（1272）に56歳で示寂したと伝える。

②篠栗町若杉乙犬の層塔部材は、四方に宝珠龕内の如来像を刻むほか、その両脇に雲文や、七宝繫状の格子文を刻む。七宝繫文は、浙江省三門県叶雲鼎墓の南宋嘉喜年間（1237-1240）の石刻と類似し、13世紀の南宋製か。

③宇美八幡宮の例は、16世紀の境内絵図に「仲哀天皇御陵」とある。宇美八幡宮には中国宋元ないし高麗製と思われる乾漆の聖母像が秘仏として祀られており、土紋装飾に宝石を嵌め込むなど海外から中国商人によって持ち込まれた可能性が高く、宇美八幡宮の檀越にも中国商人がいたようだ。

④宝満山は大山・有智山などとも称する。滋賀県大津市西教寺所蔵「兩卷疏知礼記」上巻ならびに京都府要法寺蔵「観音玄義疏記」奥書には、永久四年（1116）歳次丙申五月十一日、筑前国薄多津唐房大山船龍共三郎船頭房、以有智山明光房唐本移書畢。已上。」とあり、薄多＝博多津唐房の龍共三郎の房で、有智山（大山寺の別名）の明光房の唐本が写されたことがわかり、12世紀初頭には中国商人と関係を持っていたことがわかる。

また大宰府有智山の天台宗大山寺に帰属（寄人）する宋人の張光安は、日宋貿易に従事する通訳も兼ねた貿易商人であったが、建保六年（1218）に管崎宮留守所の行遍と、その子光助により殺害される。日宋貿易の利権をめぐる争いが原因であったと考えられる。注目すべきは、事件の翌年、肥前国神崎荘の荘官たちが、張光安の殺害された場所として、博多近辺の土地をあげ、その地を神崎荘領とするよう朝廷に訴え出ている。この事実から張光安が博多近辺に所領をもっていたことがわかり、宝満山は一貫して博多の宋商と深い関係にあった。

⑤志賀島火焰塚は、弘安四年（1281）の元襲来・志賀島上陸に先立ち、敵国降伏祈願の院宣を龜山上皇が発し、高野山の賢隆阿闍梨以下60名の僧侶たちが弘法大師作の浪切不動明王を奉じて志賀島に赴き、現在の火焰塚の場所に壇を設け70日間に渡って五壇護摩を修したところ、法火が神風を起こして元軍の船舶を難破させたと伝える。蒙古軍の退散後、壇所に不動明王の火焰形が留められ、火焰塚と呼ばれるようになった。薩摩塔がもともと火焰塚にあったものか後世に持ち込まれたかは不明だが、弘安四年（1281）の修法以降なら、13世紀後半前後であろう。

## 福岡市博多区堅粕 馬頭観音薩摩塔残欠・耕月庵層塔軸



堅粕馬頭観音大型薩摩塔部材

堅粕耕月庵中国層塔部材

箱崎神人の張興・張英兄弟は建長五年（1253）以降、管崎宮玉垣の修理を負担した事が弘安四年（1281）頃の文書に見える。張興は堅粕周辺を領有しており、堅粕薩摩塔は張興に関連して蒙古襲来（1274・1281）に先立ち搬入されたものであろう。本来は2mを越える大型品であったと推定される。

⑥⑦⑧の堅粕4丁目付近は、中世には御笠川の屈曲地点で、管崎宮神人の博多綱首張興・張英兄弟との関係が推定される。貿易商の張興・張英は、現博多区の堅粕・西崎（不明）を所有し、管崎宮の玉垣の修理を建長五年（1253）以降、負担し、弘安四年（1281）前後の資料にその名が見える。近年堅粕では中国宋代の瓦が出土している。

## 城南区弓の馬場薩摩塔と張英(鳥飼二郎船頭)・海蔵寺の関係



福岡城築城以前の古鳥飼湾と鳥飼八幡宮



城南区茶山弓の馬場薩摩塔部材

管崎神人の張興・張英兄弟は建長五年(1253)以降、管崎宮玉垣の修理を負担した事が弘安四年(1281)頃の文書に見える。弟の張興は「鳥飼二郎船頭」の日本名を名乗り「西崎」を領有していたとあるが、西公園(荒戸山)から鳥飼八幡宮旧所在地付近とみられるが未特定。城南区茶山弓の馬場には地中から掘り出された薩摩塔がある。鳥飼には聖一国師開山の禅刹海蔵寺があったと伝える。茶山弓の馬場薩摩塔は張興・海蔵寺に関連して蒙古襲来(1274・1281)に先立ち搬入されたものであろう。

⑨⑩の福岡大学に近い城南区茶山・田島の例は、油山天福寺との関係が推定される。油山には、かつて薩摩塔の残骸があった可能性が高い。油山旧在梵鐘(現在山口県防府天満宮蔵)には、文応二年(1261)銘があり、「大檀那比丘禅念故鄭三綱真之息 鑄工沙彌生蓮」と記す。鏡山猛氏は、この鄭真之なる人物は宋人の綱首で、三男である禅念が壇越となり父の追善のために鑄造した梵鐘と考える。なお前述の張兄弟の張英は「鳥飼二郎船頭」という日本人名を名乗っており、現在の早良区鳥飼あたりを拠点としていたようだ。鳥飼は油山から流れる樋井川の旧河口、草香江津付近にあり、張英も油山天福寺の壇越として薩摩塔を寄進した可能性が考えられる。

### X. 姪浜・今津周辺の禅寺と唐房をめぐる環境

福岡市西区姪浜の興徳寺は、臨済宗大徳寺派の禅寺で、文応元年(1260)北条時定が建立、文永四年(1267)宋から帰朝した南浦紹明(大応国師)が同七年興徳寺檀越に招請されたが、同九年大宰府崇福寺に移った。南浦紹明は、正元元年(1259)に入宋して虚堂智愚に師事し、師に従って杭州浄慈寺・徑山興聖万寿禅寺に学んだ

この縁で、興徳寺には、大応国師(1308没)の墓(分骨塔)とされる、宋風の唐草文がある古式の無縫塔があるが、石材は小豆色で、寧波の梅園石である可能性が高い。興徳寺には、中世に遡る閑寂な中国式庭園があるほか、門前に梅園石製の可能性がある中国式石塔の相輪も残されているため、無縫塔以外にも、梅園石製の大型石塔が存在した可能性が高く、中国人の有力檀越がいたと考えられる。

服部英雄氏は、興徳寺に接して、旦過町に隣接して当方町があり、唐房の音韻変化であると指摘している。姪浜には今東方、およびその転訛と考えられる稲当方の地名もある。今東方に隣接して、舟倉の地名がある(服部2004)。

福岡市西区今津は、博多大追捕(1151)以降に博多の中国商人たちが移動した新開地であるため「今津」という。

今津の勝福寺は、臨済宗大徳寺派に属す。『筑陽記』によると南宋から渡来した蘭溪道隆の開基と伝える。絹本着色大覚禅師(蘭溪道隆)像が残されており、蘭溪道隆は勧請開山であり、実際の開山はその弟子僧であったと思われる。当寺には地頭で、北条氏一門の大佛宗宣の袖判のある応長元年(1311)の殺生禁断を命じた古文書をはじめ、多数の中世文書が残る。北条氏の家紋である三鱗紋を山門に刻む。

昭和33年に福岡市西区大字今津の臨済宗勝福寺西の砂丘から、約200体の埋葬人骨が発見され、鉄鍋や陶磁器が出土した。人骨は頭部と体部が分離され、体だけが火葬されている異様な状態である。

出土した陶磁器は、109個が回収されたが、実際は二倍以上あったらしい。内わけは、青磁68(碗53、皿15)、白磁28(碗9、皿19)、青白磁2(四耳壺1、合子1)、黄釉陶器盤1、褐釉陶器盤1、褐釉陶器10(水注1、長胴壺9)、青花(染付)皿1、湖州鏡1などである。陶磁器は大部分が南宋期のもので青磁蓮弁文碗が多い。土壌墓群の場所も、禅宗寺院で墓所を示す旦過だった。

興徳寺は北条時定、勝福寺も北条氏一門の大佛氏との関わりを伝え、鎌倉期の北条得宗政権による怡土庄支配や、今津周辺の元寇防塁の築造、蒙古襲来に伴う寺社興行などの背景でこれらの寺が開かれたことを示している。するとそこ

に中国人の居住を暗示する地名が遺されていることは、博多周辺のチャイナタウンの政策的解体の過程で、彼らが北条政権の管理と監視のもとに置かれたことを暗示している。

## V 九州発見の中国製石塔の集成

### 九州将来宋代石造物一覧（経石・薩摩塔・層塔・無縫塔）

番	寺社名	所在地	高さ	構成	須弥壇 平面	遺存	備考
1	宗像大社阿弥陀経石	福岡県宗像市田島宗像大社	高 168 . 0cm	3 材	四角	完存	宗像大社伝世
2	首羅山遺跡薩摩塔①	福岡県糟屋郡久山町大字久原	残 118. 0cm	4 材か	四角	屋根欠	首羅山山頂
3	首羅山遺跡薩摩塔②	福岡県糟屋郡久山町大字久原	残93. 5cm	4 材か	四角	須弥壇・塔身・ 相輪欠	首羅山山頂
4	若杉山乙犬層塔	福岡県糟屋郡篠栗町乙犬		複材軸	四角	軸部破片	太祖宮下宮の御仮屋
5	もうたり地藏尊	福岡県糟屋郡志免町					
6	旧宇美八幡宮薩摩塔	福岡県糟屋郡宇美町	残47cm	複材	四角	屋根欠	宇美八幡宮境内旧在 仲哀天皇
7	旧宝満山薩摩塔	福岡県太宰府市宰府	残48. 5cm	一材	四角	ほぼ完形	太宰府市内に移築
8	伝武藤資頼・資能墓	福岡県太宰府市安養寺址		一材	四角	相輪欠	資頼は1228没。資能は 1281没。
9	火焰塚薩摩塔	福岡県福岡市志賀島火焰塚	残37cm	一材	四角	雲脚・軸部	
10	恵光院旧筥崎宮龍王社 層塔	福岡県福岡市東区筥崎恵光院	約 2 m	9 材	四角	相輪部・屋蓋欠	廃仏毀釈で移転 燈籠堂観音石仏1208
11	吉塚明光寺	福岡県福岡市博多区吉塚三丁 目		複材	六角	笠のみ	明光寺は博多旧在。
12	堅粕馬頭観音堂薩摩塔	福岡県福岡市博多区堅粕 4 丁 目	残95. 6cm	複材	四角	雲脚蓮座 壺部	
13	堅粕耕月院 層塔	福岡県福岡市博多区堅粕 4 丁 目	残29. 3cm	複材	四角	軸のみ	
14	聖福寺	福岡県福岡市博多区		複材	六角		
15	博多遺跡群	福岡県福岡市博多区		複材	四角		
16	圓應寺塔	福岡市中央区簗子		複材	四角		
17	茶山薩摩塔	福岡市城南区茶山 6 丁目 1 番 地	残48. 0cm	一材	六角	塔身、屋根一部 欠	3月24日地藏縁日
18	田島勝軍地藏薩摩塔	福岡市城南区田島 3 丁目 4 番 地旧在	残65cm	一材	六角	須弥壇塔身、屋 根一部欠	中国人人名あり。篠栗 南蔵院に移動後散逸
19	油山天福寺薩摩塔？	福岡市城南区西油山	残高		四角？	壺部僧形像残 欠	史跡名勝天然記念物報 告に写真
20	油山天福寺薩摩塔	福岡市城南区西油山	残高	一材	四角？	基壇四天王像 残欠	中国瓦集中地点より 2004採集
21	興徳寺相輪・四天王彫 刻部材	福岡市西区姪の浜	相輪・四 天王	複材	六角	相輪のみ	
22	大應国師無縫塔	福岡市西区姪の浜	無縫塔	複材	六角		大応国師無縫塔
23	背振山靈仙寺薩摩塔①	佐賀県吉野ヶ里町背振山	残20cm	複材	四角	雲脚のみ	

24	背振山靈仙寺薩摩塔②	佐賀県吉野ヶ里町背振山		複材		壺部のみ	
25	背振山靈仙寺薩摩塔③	佐賀県吉野ヶ里町背振山		複材			
26	仁比山神社地藏院薩摩塔	佐賀県神埼郡神埼町の仁比山神社地藏院		複材		壺部のみ	首羅山東塔に似る。
27	黒髪山西光密寺薩摩塔	佐賀県武雄市内内町	残60.1cm	一材	六角	屋根欠	定林寺管理
28	妙覚寺薩摩塔①	佐賀県多久市南多久町妙覚寺	残56cm	一材	四角	屋根欠	
29	妙覚寺薩摩塔②	佐賀県多久市南多久町妙覚寺	残22cm	一材	四角	須弥壇上部・塔身	
30	下寺観音堂薩摩塔①	長崎県田平町下寺観音堂	40cm	一材	四角	屋根・壺・欄干	花崗岩製。福建産か
31	下寺観音堂薩摩塔②	長崎県田平町下寺観音堂	23.3cm	一材	壺部	壺部のみ	首羅山東塔に似る。
32	海寺跡薩摩塔①	長崎県田平町山内免海寺跡	残50cm	一材	四角	屋根欠	付近に宋風獅子あり
33	海寺跡薩摩塔②	長崎県田平町山内免海寺跡	残20cm	複材	四角	須弥壇軸部のみ	付近に宋風獅子あり
34	館山是興寺跡薩摩塔	長崎県平戸市鑑川町	残20cm	一材	四角	須弥壇上部・塔身	
35	誓願寺薩摩塔	長崎県平戸市	残42.4cm	一材	四角	欄干・壺部	山内新発見分
36	桜溪書院垂跡薩摩塔	長崎県平戸市岩の上町	残35.5cm	一材	四角	屋根欠	最教寺付近
37	安満岳山頂薩摩塔①	長崎県平戸市主師町安満岳	残63cm	一材	四角	ほぼ完形	
38	安満岳山頂薩摩塔②	長崎県平戸市主師町安満岳	残50cm	一材	四角	基礎部分のみ	
39	志々伎中宮薩摩塔①	長崎県平戸市野子町志々伎神社中宮	残24.5cm	複材	四角	須弥壇主要部のみ	背面は四天王でなく雲気
40	志々伎中宮薩摩塔②	長崎県平戸市野子町志々伎神社中宮	残29cm	複材	六角	須弥壇主要部	
41	志々伎中宮薩摩塔③	長崎県平戸市野子町志々伎神社中宮		複材	四角	屋根のみ	
42	志々伎沖の宮薩摩塔	長崎県平戸市野子町志々伎神社沖の宮	残151.5cm	複材	六角	大破、塔身主要部・屋根片発見	付近に宋風獅子あり
43	宇久島毘沙門寺①	長崎県佐世保市宇久島					
44	宇久島毘沙門寺②	長崎県佐世保市宇久島					
45	浦上家墓地	長崎県佐世保市針尾中町				笠・相輪	針尾(鯛尾)城主浦上家墓地
46	龍福寺跡	長崎県大村市立福寺町字寺屋敷	残19cm	複材	六角	軸部のみ	郡七山十坊の龍福寺址に所在
47	川畑	鹿児島県南さつま市加世田川畑					
48	小湊	鹿児島県南さつま市加世田小湊					
49	柴原遺跡	鹿児島県南さつま市金峰町宮崎					
50	伝虎御前塔	鹿児島県南九州市川辺町神殿	残76.0cm	一材	四角	ほぼ完形	
51	旧宝光院旧在	鹿児島県南九州市川辺町諏訪運動公園	残37cm	一材	四角	塔下半のみ	宝光院跡旧在市指定文化財
52	運朝寺跡旧在	鹿児島県南九州市川辺町水元神社	全194.1cm	複材	六角	ほぼ完形	運朝寺跡旧在市指定文化財



53	旧坊津一乗院	鹿児島県南さつま市坊津町坊津歴史資料センター輝津館	残70.5cm	複材	四角	ほぼ完存	坊津一乗院旧在
54	沢家墓地	鹿児島県霧島市隼人町	残高30cm	2材	六角	須弥壇下榿と塔身前半	鹿児島神宮（旧大隅正八幡宮）社家沢家墓地

## VI 九州発見の中国製石塔の検討

### 1. 所在地の占地傾向

所在地	法量	港湾都市	臨海山岳	内陸平野・山岳
福岡県	大型	管崎宮恵光院 姪浜興徳寺 堅粕馬頭観音		
	中型	吉塚明光寺・簀子円応寺		首羅山・油山天福寺
	小型	堅粕耕月庵・茶山勝軍地藏・田島	志賀島火焰塚	宝満山・宇美八幡・乙犬層塔
佐賀県	大型			
	中型			仁比山地蔵堂・背振霊仙寺
	小型			黒髪山西光寺・多久妙覚寺
長崎県	大型	志々伎沖ノ宮		
	中型	大村龍腹寺	安満岳・下寺観音堂	
	小型	誓願寺・是興寺松浦氏墓所・最教寺・桜溪書院跡	志々伎山中宮・針尾城・下寺観音堂	
鹿児島県	大型			水元神社
	中型			沢家墓地
	小型	坊津一乗院		虎御前、宝光院

### X I. 中国製石造物を模倣した九州の中国系石造物

九州では13世紀前半から中葉にかけて熊本県の阿蘇溶結凝灰岩製の石造物が出現する。関西や関東でも、まず院政期に凝灰岩や滑石などの軟質石材石塔が出現し、その後には花崗岩や安山岩など硬質石材への移行が確かめられる。よって九州の凝灰岩製石塔の出現も、同じ脈絡で理解されてきた。

しかしこれまで十分検討されたことがないが、九州の凝灰岩製石塔は、出現の当初から強い地域色を示し、特に半肉彫の四方仏が関西の普及に先んじて出現する点は、関西などからの様式的影響が地域化するという従来の構図では、うまく説明できない。

かといって、複雑な石塔が九州でまったく自生したと考えることには無理がある。

しかし、梅園石製の小型塔である薩摩塔・類薩摩塔＝須弥山塔の広域な展開だけでなく、2mを越える中国製大型石塔（鹿児島県川辺町水元神社薩摩塔・長崎県平戸市志々伎神社中宮薩摩塔・福岡市堅粕馬頭観音薩摩塔、福岡市管崎恵光院層塔）の搬入が確実視される現在、九州では関西様式の波及とは別個に、12世紀後半頃から中国製石塔が受容され、13世紀前半までに、中国製石塔を模倣した層塔や異形の宝塔、四天王像や仁王像が出現した可能性を検討できる段階に至ったと考えられる。

薩摩塔のような中国様式塔の要素が、九州に受容され、九州の地域様式成立に影響を与えたとする展望は、松田朝由氏によって既に示されているが、その要素を列挙すると、

- ①肉彫の四天王や磨崖仏
- ②層塔の四方仏（九州では13世紀前半、関西では13世紀後半以降に主流となる）
- ③雲文や牡丹文、唐草文、鬼面文などの中国的意匠
- ④幾何学的な日本の中世石塔と対照的な、過剰に装飾的な構成
- ⑤宋風獅子の強い影響を示す古式石造狛犬

⑥宋風の重たい衣の表現がある石仏

などの点が指摘される。

①には、鹿児島県大隅国分寺隼人塚四天王（12世紀か）佐賀県大和町池上四天王像（12世紀か）、佐賀県唐津市相知町の鶴殿窟磨崖仏の中国風天部像などが挙げられる。

②には嘉禄三年（1227）の熊本県永国寺五重石塔、寛喜二年（1230）の熊本県球磨郡湯前町明導寺層塔3基、貞永元年（1232）の福岡県筑後市熊野坂東寺層塔、大宰府原山寺層塔などの阿蘇凝灰岩石塔例がある。

③には、福岡県久山町薩摩塔の雲文、篠栗町乙犬石塔の雲文、宗像市阿弥陀経石の唐草文、福岡市興徳寺無縫塔の唐草文などの梅園石製石塔の要素を模倣したと思われるものが、貞和六年（1350）の大牟田市宮ノ原天満宮五重石塔、貞和七年（1351）の同宮伽藍塔、貞和七年（1351）の大牟田市乙宮神社石殿、正平十年（1354）の大川市風浪神社層塔、正平十一年（1355）の南関町阿蘇神社層塔など、大工藤原助継（助次）の製作した一連の阿蘇凝灰岩製石塔に見ることができる。

④には、佐賀県太良町竹崎観世音寺層塔や佐賀県大和町高城寺層塔に瓦葺や格狭間を表現した過剰装飾の阿蘇凝灰岩石塔の例がある。

⑤には、宗像大社例のような宋風獅子を模倣したと思われる大牟田市教楽来天満宮の寛正四年（1463）頃の石造狛犬の例がある。

⑥には、宗像市阿弥陀経石のような宋風如来像、福岡市筥崎恵光院十一面観音（聖母？）石仏のような宋風石仏を模倣したと思われるものに佐賀県大和町高城寺石造弥勒菩薩像などの例がある。

## XII. 中国商人の倭人への同化

やや時期が降る資料だが、撰者不明『日本風土記』と茅元儀『武備志』がある。前者は1592年成立の侯継高『全浙兵制考』の附録に収められている明代の日本研究書で、1561年成立の鄭若曾『日本図纂』の内容を参照しており、16世紀終わり頃に書かれたものと考えられる。後者は1619年に成立した兵書である。博多に関する記事は、『日本風土記』と内容が共通し、『日本風土記』を典拠にしたと考えられる。『日本風土記』巻二、商船所聚には、

「我国海商聚住花旭塔津（博多津）者多。此地有松林、…。有一街、名大唐街。而有唐人、留恋於彼生男育女者、有之。昔雖唐人、今為倭也。」すなわち博多には「大唐街」があり、海商が多く住んでいたが、16世紀終わり頃には倭人と同化していたという。この唐人を、宋代海商とする説（森克己1975、佐伯1988、川添1988、林1998）と、明代海商とみる説（榎本渉2005）の両説がある。

## XIII. まとめ—博多のチャイナタウンの成立から解体まで

鴻臚館焼亡（1047）後に法的保護と規制から離脱した中国商人は、まず博多・筥崎・香椎などで商業を拡大し、商品である米や木材、炭、鉱物資源の獲得のため、しだいに都市周辺の農村や、山林資源のある山岳にも進出した。彼らの財力と技術は、荘園開発をもくろむ寺社勢力からも注目された。

当時、比叡山延暦寺や石清水八幡宮など関西の権門寺院から九州に入ってきた僧侶たちは、まず観世音寺などの古代以来の大寺院に学僧などの形で入り込み、中央の最新の教学で地方の古い教学を論破・屈服させて主導権を握り、次に如法経信仰を唱導する天台浄土系勸進聖を中央から呼び込んだ。彼らは旧郡司層などが独占する利権から閉め出されていた新興武士・名主層や中国商人を、自らが主催する経塚造営や寺社興業に結縁させることで寺院やそこが保有する荘園経営の利権に呼び込んだ。

中世景観を特徴付ける港湾・都市→農村・居館→山岳・宗教権門という重層的構造ができあがると、相互の連携が前代にない効率と収益をもたらした。こうした合理的なシステムは、仏教的な勸進システムと中国商人の財力・技術力を結合することではじめてその枠組みがつけられたと考えたい

中国商人たちも檀越として寺社経営に参加するようになり、その枠内で各種開発を展開し、両者の共生関係が成立していった。ところが中国商人たちの活動の拡大は、やがて新興武士・名主、あるいは日本商人たちとの間に利権をめぐる軋轢をもたらし、ついには「博多大追捕」という破局を招くこととなった。福岡周辺の経塚が激減するのは、こうした結縁の時代の終わりを意味する。

都市部での商業基盤に大きな打撃を受けた中国商人たちは、自身の権益保護のため、博多郊外の新開地に活路を求め、不輸不入権のある宗教権門の特権の傘下に入ろうとし、特定の寺社権門との関係を強化し、一族の男性を僧侶にしたり、

女性を官司の妻としたりした。この結果、12世紀末から14世紀にかけて、大量の中国製石造物が各地の港湾や山岳の寺社に寄進された。陳和卿や尹行末などの活動が、最終的に東国にまで及ぶことも、そうした東アジア的構図に帰納出来るのではないかと思える。

しかし蒙古襲来の戦火と、中国に対する猜疑心は政策的なチャイナタウンの解体につながった。

唐坊や旦過などのチャイナタウン地名は、執権北条氏一門ゆかりの禅宗寺院周辺に集中するため、博多の中国商人は分散させられて北条氏の監視下に置かれたらしい。その後、南北朝期になると、蒙古襲来以後も続いていた元の対日貿易は、寧波での日本商人の狼藉などで次第に規制が厳しくなる。やがて明が成立すると、きびしい海禁政策が実施され、国際都市博多と中国の関係は、次第に朝鮮王朝や瀬戸内との関係に変化し、近世には対外貿易の拠点には平戸や長崎に移るのである。

#### XIV. 結語

九州の中国製石塔はまず、1085年の中国商人の硫黄直接購入の動きに象徴される11世紀末以降の日宋の重量物交易のなかで搬入された。山内晋次氏が試算したように、船倉には多量のバラストを積載する可能性があり、実際に寧波船が多く来航する九州では、中国沿海産石材の入手は、さほど困難ではなかったと考えられる。

やや後代の例だが、寧波市象山港で発掘された明代戦船からは、バラスト石が多く見出されている（『考古』1998年3期）。また清代沈船に墓廟用と思われる彫刻を積載している例も知られている。またさきごろ筆者の柳崎は、福岡市西区今津海底遺跡の海岸で、南宋代の瓦を発見した。この瓦もまた、船倉にバラストとして積まれたと考えられる文物である。

平戸への集中は、硫黄や薩摩・肥後・肥前の木材の積み替え港であったため、博多や薩摩とならぶ集中地となったと考える。

また福岡市姪浜興徳寺には1308年に没した大応国師の墓塔に梅園石が使用されており、興徳寺境内の事例は14世紀以降の可能性があるが、また今回の塚で発見された瓶のような形の薩摩塔壺部は、塚が日明貿易の拠点港湾として繁栄した14世紀後半から15世紀前半、特に応永の乱（1399）前後を下限と想定するのが自然である。よって薩摩塔は、かねてから想定されていたように、球形→瓜形→徳利形→壺形→瓶形、という変遷を辿ると推測しうる。

九州搬入の中国製石塔について、まず確認事項については、

- ①九州には、現在40基前後の中国製石塔の存在が確認される。
- ②中国製石塔には阿弥陀経石・薩摩塔・類薩摩塔のほか、層塔・無縫塔・隅切五輪塔？が存在し、いずれも浙江省周辺の凝灰岩や凝灰質泥岩製で、所謂梅園石が大部分を占める。
- ③石塔以外に、礎石のほか宋風獅子や石仏が見られるが、これらには花崗岩や石灰岩を含み、福建省や江蘇省産石材を含むと考えられる。
- ④中国製石塔は12世紀代に搬入が開始され、14世紀までの存続が確実視される。
- ⑤分布は鹿児島・長崎・佐賀・福岡県下に見られるが、今後追加拡大する可能性が高い。
- ⑥分布地は、主要港湾周辺の寺社、航海目標や水源にあたる山岳である。
- ⑦中国製石塔と石獅子がセットで存在する場合は比較的多い。
- ⑧中国製石塔の一部は、12～14世紀の九州の中国風石塔・石造物の発生に影響を与えている。

以上を踏まえての、今後の見通しとしては、

- ①中国製石塔の搬入には、博多綱首をはじめとする中国人海商が関与している。
- ②中国製石塔の搬入された寺社は、傘下の神人や寄人を介して対外交易と深く関与している。
- ③石塔は、主要港湾に大型・中型品が分布し、航海目標や水系山岳には中型・小型品が分布し、更に深い山岳に小型品が分布するため、同心円構造をなしている。
- ④平戸と坊津の薩摩塔は、倭板＝木材や硫黄島産硫黄の交易との関係が推定される
- ⑤臨済禅宗と関係する寺院に遺例が多く、中国人檀越の存在を窺わせる痕跡がある。
- ⑥13世紀前半～後半に搬入のピークがある。
- ⑦造立には物故した縁者の供養の意図が窺え、特に宋人海商やその縁者の菩提を弔った可能性があり、その存在する寺社に廟的な性格が考えられる。

⑧石造物が寄進された寺社には、中国商人との婚姻関係や寺人・神人関係が確認出来、「墳寺」化していたと推定される。

## 引用参考文献

- 吉河功2000『石造宝篋印塔の成立』第一書房、年
- 高津孝・橋口亘2008「薩摩塔小考」『南日本文化財研究』7 pp.20-33.
- 高津孝・橋口亘・大木公彦2010「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」『鹿大史学』57 pp.25-38.
- 高津孝・橋口亘・大木公彦2012「薩摩塔研究（続）—その現状と問題点」『鹿大史学』59 pp.25-38.
- 高津孝2012「薩摩塔と礎石—浙江石材と東アジア海域交流」『江南文化と日本—資料・人的交流の再発掘』国際日本文化センター
- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘・内村公大2010「日本における薩摩塔・礎石の石材と中国寧波産石材の岩石学的特徴に関する一考察」『鹿児島大学理学部紀要』43 pp.1-15.
- 大木公彦2011「薩摩塔石材は中国寧波産梅園石」『鹿児島大学総合研究博物館』newsletter, No.28 pp.4-7.
- 橋口亘・高津孝・大木公彦2011「大応国師供養塔（福岡市興徳寺）四天王像彫出部材の発見と薩摩塔」『南日本文化財研究』No.12 南日本文化財研究刊行会 6-13.
- 井形進2011「薩摩塔研究概観—新資料の紹介と共に—」『古文化談叢』第65巻 九州古文化研究会
- 井形進2011「薩摩塔の時空と背景」『第85回九州藝術学会発表要旨』
- 井形進2012『薩摩塔の時空 異形の石塔をさぐる』花乱社
- 井形進2018『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究—薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかる考察—』平成二六年度～二九年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書 課題番号 二六三七〇一五五 研究代表者井形進 九州歴史資料館
- 窪壮一郎2013「薩摩塔と全真教」（Web上で公開）pp.1-14.
- 桃崎祐輔 2017. 8. 28「薩摩塔と助継塔—九州に搬入された中国製石塔と在来石塔への様式的影響—」『第5回在来知研究会』佐賀大学理工学部3号館1階会議室.
- 江上智恵2018「薩摩塔の編年試論—考古学の見地から—」『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究—薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかる考察—』平成二六年度～二九年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書 課題番号 二六三七〇一五五 研究代表者 井形進（九州歴史資料館）九州歴史資料館 pp. pp. 101-122.
- 田中史生2022「『平家物語』と薩摩塔—海商船と南九州—」『国立歴史民俗博物館研究報告』232 pp. 301 - 318

## 2011参考文献

- 井形進2005「宗像大社の宋風獅子とその周辺」『佛教藝術』283号 毎日新聞社 pp.81-98.
- 井形進2008「白山遺跡の薩摩塔」『九歴だより』No.27 九州歴史資料館
- 井形進2008「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会 pp.65-83.
- 井形進2009「太宰府所在の薩摩塔」『市史研究ふくおか』第4号 福岡市博物館市史編さん室
- 石原渉2000「中世礎石考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂 pp.884-909
- 伊藤幸司2010「硫黄使節考—日明貿易と硫黄」『東アジアを結ぶモノ・場』アジア遊学 勉誠出版
- 伊原弘2000「宋代の道路建設と寄進額—寧波発見の博多在住宋人の碑文に関して」『日本歴史』626
- 伊原弘2006「寧波で発見された博多在住の宋人寄進碑文続論」『アジア遊学』91
- 榎本渉2005「『榮西入唐縁起』からみた博多」『中世都市研究11 交流・物流・越境』新人物往来社 pp.83-102.
- 榎本渉2007「明州市舶司と東シナ海海域」『東アジア海域と日中交流』吉川弘文館
- 榎本渉2010「僧侶と海商たちの東シナ海」選書日本中世史4 講談社選書メチエ469
- 遠藤隆俊2007「墳寺から祀堂へ—宋元士大夫の墳墓と祖先祭祀」『東北大学東洋史論集』pp.55-82.
- 大石一久1998「中世の石造美術」『平戸市史 民俗編』平戸市
- 大石一久1999『石が語る中世の社会 長崎県の中世・石造美術』（単著）ろうきんブックレット
- 長崎県労働文庫
- 大石一久2005「第3節 中世・石造物から見た小鯛城（針尾城）」『針尾城跡 平成16年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書』佐世保市教育委員会 pp.64-65.

- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』42 鹿児島大学理学部 pp. 11-19.
- 大庭康時2004「港湾都市博多の成立と発展」『中世都市研究』10 港湾都市と対外貿易 新人物往来社 pp. 9-20.
- 岡崎敬1968「福岡市(博多) 聖福寺発見の遺物について—大陸舶載の陶磁と銀挺—」『九州文化史研究所紀要』第13号 九州大学九州文化史研究施設 pp. 1-28.
- 小田富士雄1980「出光美術館所蔵の九州発見経筒」『出光美術館館報』32号 pp. 14 - 15.
- 小田富士雄1981「出光美術館所蔵の九州発見経筒」『古文化談叢』8号 九州古文化研究会pp. 281 - 296.
- 小田富士雄編1982『宝満山の地宝—宝満山の遺跡と遺物—』太宰府天満宮文化研究所刊
- 糟屋地区文化財担当者会編2008『糟屋の祈り』
- 加藤和歳2009「大宰府所在薩摩塔の応急的保存修復処置」『九州歴史資料館 研究論集』34 pp. 57-68.
- 川添昭二1994「宗像大社の中世資料 色定の一筆一切経と宋商の助成」『中世の海人と東アジア』宗像シンポジウム2 海鳥社 pp. 185-189.
- 川辺町教育委員会1982『川辺町の文化財 文化財要覧』
- 川辺町教育委員会1997『清水磨崖仏群 鹿児島県指定文化財(史跡) 川辺町文化財調査報告書』
- 川辺町役場1961「これも貴重な文化財—神殿虎御前の墓—」『広報かわなべ』1月号(第39号)
- 九州歴史資料館1986『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』
- 楠井隆志2005「宇美八幡宮 脱活乾漆造聖母宮神像」『佛教藝術』282号 pp. 34-50.
- 熊本県球磨郡湯前町1985『重要文化財 明導寺七重石塔保存修理工事報告書』
- 佐伯弘次1990「中世の糟屋と筥崎宮領」『戸原麦尾遺跡Ⅲ』福岡市教育委員会
- 竺沙雅章1979「宋代墳寺考」『東洋学報』第61巻第1・2号 pp. 35-66.
- 静永健2009「阿弥陀経石の航路」『から船往来—日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』中国書店 pp. 131-150.
- 高倉洋彰1992「寧波市現存の太宰府博多津宋人刻石について」『究班 埋蔵文化財研究会十五周年記念論文集』埋蔵文化財研究会 pp. 375-386.
- 高津孝・橋口亘2008「薩摩塔小考」『南日本文化財研究』No.7 『南日本文化財研究』刊行会
- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』Vol. 42 pp. 11-19
- 高津孝・橋口亘・大木公彦2010「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」『鹿大史学』第57号 鹿大史学会 鹿児島 pp. 25-38.
- 竹岡勝也1934「西油山天福寺址」『史蹟名勝天然記念物調査報告書(史蹟の部)』第九輯 福岡縣 pp. 149-162. (昭和四十八年十二月一日覆版 福岡県文化財資料刊行会 発行)
- 多田隈豊秋1975『九州の石塔』上巻 西日本文化協会
- 多田隈豊秋1978『九州の石塔』下巻 西日本文化協会
- 田村憲美2003「中世『材木』の地域社会論」『日本史研究』488号
- 段谷地所開発株式会社1976『京ノ隈遺跡—福岡市西区田島所在の古墳と経塚の調査』
- 常松幹雄1992「博多出土古瓦に関する一考察—押圧文瓦・草花文瓦の分布とその背景」『法哈口達』第1号 博多遺跡群研究誌 博多研究会 pp. 5 - 21.
- 戸田芳実1991「平安初期の五島列島と東アジア」『初期中世社会史の研究』東大出版会 pp. 319-325.
- 長沼賢海1953「国際混血児」『史淵』第56輯 九州大学文学部内 九州史学会 pp. 43-84.
- 二階堂善弘2007「報告4: 宋代の航海神招宝七郎と平戸七郎大権現」『東アジア海域交流史 現地調査研究—地域・環境・心性—』第2号 平成17年度~21年度 文部科学省科学省特定領域研究 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生— 現地調査部門 pp. 50-52.
- 橋口亘2004「中世港湾坊津小考」『中世西日本の流通と交通 行き交うヒトとモノ』橋本久和・市村高男編 高志書院 pp. 47-66.
- 服部仁2008「東大寺石獅子の石材について」『東大寺石獅子をめぐる研究集会』レジュメ集 中日石造物研究会

- 服部英雄2004「旦過と博多」『中世都市研究』10 港湾都市と対外貿易 新人物往来社 pp. 21-36.
- 林文理1998「博多綱首の歴史的位置」『古代中世の社会と国家』清文堂
- 東脊振村文化財研究会1980『霊仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集
- 久山町教育委員会2008『首羅山遺跡—福岡平野周辺の山岳寺院—』
- 藤澤典彦2007「3. 泉州開元寺塔」『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究—宝篋印塔を中心に—』シルクロード学研究V o 1. 27 (財)なら・シルクロード博記念国際交流財団／シルクロード学研究センター pp. 13-17.
- 藤瀬浩蔵1990「郷土研究会 現地研修 (南多久町) 高野神社～延寿寺～妙覚寺ほか 平成元年九月十六日」『丹邱の里』7号 多久郷土史研究会 pp. 43-52.
- 松尾尚哉2009「宇美町所在の薩摩塔」『還暦、還暦?、還暦!—武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集—』武末純一先生還暦記念事業会 pp. 359-368.
- 松田朝由2008「鹿児島県の薩摩塔」『南日本文化財研究』No. 7 南日本文化財研究刊行会
- 眞野脩2009「恵光院の石塔」『吉松通信』No. 7
- 森弘子2009『宝満山の環境歴史学的研究』岩田書院
- 森本朝子1986「博多居留宋人に関する新資料」『文明のクロスロード Museum Kyushu』19 九州のなかのアジア Museum Kyushu編集委員会 博物館等建設推進九州会議 pp. 19-24.
- 桃崎祐輔2008. 9. 28. 「?齋館体制の崩壊から中世社会へ—遺跡に遺された中国商人の活動とその遺物—『九州の中世学—交易・開発・信仰—』七隈史学会第10回大会記念シンポジウム予稿集 七隈史学会 pp. 5-34.
- 桃崎祐輔2008「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院』久山町教育委員会 pp. 41-64.
- 桃崎祐輔2010「第1章 糟屋郡域の考古資料にみる中世社会の成立課程と対外交渉—山岳寺院・仏像・経塚・石造物—」『福岡大学考古資料集3 福岡県糟屋郡若杉山麓の中世資料の調査』福岡大学考古学研究室研究調査報告第9冊 pp. 5-24.
- 森克己1975『新訂日宋貿易の研究』国書刊行会
- 森井啓次2008「墨書宋人銘の書かれた経筒」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集— 下巻』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会 pp. 625-634.
- 山内晋次2003『奈良平安期の日本と東アジア』吉川弘文館
- 山内晋次2009『日宋貿易と硫黄の道』日本史リブレット75 山川出版社
- 山川均2007「1. 洛陽橋北塔」『中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究—宝篋印塔を中心に—』シルクロード学研究V o 1. 27 (財)なら・シルクロード博記念国際交流財団／シルクロード学研究センター pp. 7-9.
- 山村信榮2008「大宰府における経塚造営とその背景」『経塚が語る中世の世界』小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司共編 別府大学文化財研究所企画シリーズ①「ヒトとモノと環境が語る」pp. 165-178.
- 山本義孝2008「宮寺様式と山岳寺院」『忘れられた霊場をさぐる3—遠江における山寺の分布—』報告集 栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団 平成18年度 栗東市出土文化財センター講座 pp. 44-52.
- 八尋和泉・吉良国光1984『恵光院』宗祖弘法大師御入定千百五十年御遠忌 恵光院本堂落慶記念
- 米田真理子2010「真福寺大須文庫蔵『改偏教主決』にみる栄西の九州での活動」『栄西と中世博多展』福岡市博物館開館20周年記念・NHK福岡放送局80周年記念 対外交流史5 福岡市博物館 pp. 11-16.
- 願文壁・林士民1985「寧波現存日本国太宰府博多津華僑刻石之研究」『文物』1987-7 pp. 26-31.
- 呉志票2009「浙江麗水靈鷲寺石塔」『東方博物』第30輯 浙江省博物館 浙江大学出版会 pp. 6-14.
- 叶挺鏄2006「浙江瑞安土羊坑石塔の構造と建築特徴」『東方博物』第18輯 浙江省博物館編 浙江大学出版会 pp. 82-87.
- 楊古城・龔国榮2006『南宋石彫』寧波出版社